

経済・金融 フラッシュ

1 月日銀決定会合:

先行き見通しを上方修正、日銀回復シナリオに自信を深める

経済調査部門 主任研究員 矢嶋 康次

TEL:03-3512-1837 E-mail: yyajima@nli-research.co.jp

1. 先行き見通しを上方修正。10 月展望レポートからの大きな修正なし、先行き緩やかな回復シナリオに自信を深める

日銀は 24-25 日に金融政策決定会合を開き、政策金利である無担保コール翌日物金利の誘導目標を 0-0.1% 程度に据え置き(全員一致)、総額 35 兆円の基金創設による各種金融資産買い入れにも変更はなかった。

現状の景気判断については、「緩やかに回復しつつあるものの、改善の動きに一服感が見られる」と先月同様となった。

先行きについては「景気改善テンポの鈍化した状況から徐々に脱し、緩やかな回復経路に復していくとみられる」と、先月の「景気改善テンポの鈍化した状況がしばらく続く」から上方修正した。

日銀 景気判断・見通し

	現状
2011年1月	(据え置き)
2010年12月	(据え置き)
2010年11月	緩やかに回復しつつあるものの改善の動きに一服感がみられる
2010年10月(展望)	(据え置き)
2010年10月	緩やかに回復しつつあるものの改善の動きが弱まっている
2010年9月	(据え置き)
2010年8月臨時	(据え置き)
2010年8月	(据え置き)
2010年7月	(据え置き)
2010年6月	(据え置き)
2010年5月	景気は緩やかに回復しつつある
2010年4月	景気は持ち直しを続けている
2010年3月	(据え置き)
2010年2月	(据え置き)
2010年1月	(据え置き)

リスク要因については新興国・資源国経済の上振れを指摘した。下振れについては「米国経済に対する懸念は一頃に比べて後退しているものの、米欧経済の先行きや国際金融市場の動向を巡る不確実性がある」と指摘している。

昨年 10 月にまとめた「経済・物価情勢の展望(展望レポート)」の中間評価も実施された。2010 年度の成長率は、過去の実績値の改定の影響もあって上振れるものの、2011 年度、2012 年度の成長率は、概ね見通しに沿って推移する」と評価した。また物価については、「国内企業物価・消費者物価(除く生鮮食品)

とも、2011 年度は、国際商品市況高の影響などから、やや上振れるとみられる一方、2012 年度は概ね見通しに沿って推移する」とした。

▽2010～2012 年度の政策委員の大勢見通し

——対前年度比、%。なお、< >内は政策委員見通しの中央値。

	実質 GDP	国内企業物価指数	消費者物価指数 (除く生鮮食品)
2010 年度	+3.3～+3.4 <+3.3>	+0.5～+0.6 <+0.5>	-0.4～-0.3 <-0.3>
10 月時点の見通し	+2.0～+2.3 <+2.1>	+0.7～+0.9 <+0.9>	-0.5～-0.3 <-0.4>
2011 年度	+1.4～+1.7 <+1.6>	+0.7～+1.2 <+1.0>	0.0～+0.4 <+0.3>
10 月時点の見通し	+1.5～+1.9 <+1.8>	+0.4～+0.7 <+0.5>	0.0～+0.3 <+0.1>
2012 年度	+1.9～+2.2 <+2.0>	+0.5～+0.8 <+0.7>	+0.2～+0.8 <+0.6>
10 月時点の見通し	+2.0～+2.4 <+2.1>	+0.3～+0.8 <+0.6>	+0.2～+0.8 <+0.6>

今回日銀は先行きの見通しを上方修正し、回復シナリオの蓋然性に自信を深めている。今後の金融政策は、円高リスクが実現しない限り、現状維持が基本スタンスだろう。

しかし、海外経済・金融の不確実性が高い状況に変わりはない。また政治との関係では、①3月に交代が予定されている須田審議委員、6月には野田審議委員の後任人事、②政局混迷の中で追加緩和圧力(または日銀法改正なども)などの問題がでてくることも予想される。8月の CPI の基準改定で改定幅が大きければ当然デフレ議論が強まることも大いに予想され、今回先行きの見通しを上方修正したからといって、今後追加緩和見送りという一方向に議論が流れないことも十分ある。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。